第24回みんゆう県民大賞を受賞した芸術文化賞の長谷川ファミリー（福島市）、スポーツ賞の東洋大陸上競技部監督の酒井俊幸さん(37)＝石川町出身、ふるさと賞のみろく沢炭鉱資料館長の渡辺為雄さん(88)＝いわき市＝がそれぞれたどってきたこれまでの足跡と今後目指す未来を紹介する。

第24回 みんゆう県民大賞 1

芸術文化賞

長谷川ファミリー（上）

積み重ねて 演奏800回

バイオリンとチェロの演奏に乗せ、柔らかな女性の歌声が響く。歌は「荒城の月」や「カントリーロード」など、親しみやすい曲ばかり。会場では、人々が笑顔で耳を傾ける。

長谷川ファミリーは、福島市を拠点に約20年間、県内外でコンサートを続ける母子3人の音楽グループ。

声楽家の母、長谷川朝子（ともこ）さん(59)＝長谷川音楽スクール代表＝が主に歌とハープ、長女千鶴さん(31)＝東京学芸大・東京音大非常勤講師＝がバイオリン、長男弘樹さん(27)＝兵庫芸術文化センター管弦楽団員＝がチェロを担当する。

「ほのぼのコンサート」と名付けた演奏会は昨年、800回を超えた。会場は学校や地域のホール、福祉施設など。地域の人たちの求めに応じて訪れる。

右から朝子さん、千鶴さん、弘樹さん

心を伝える

「聴く人の心が温かくなったらいいな。いつもそんな思いを込めて演奏しています」と朝子さん。そして、生の演奏に触れた人たちから「また来て」と声が掛かる。その積み重ねが800回なのだという。

子どもから大人まで多くの人を引きつける演奏には確かな技術の裏付けがある。3人は皆、クラシックを学んできた音楽家。ただ、朝子さんは「会場を沸かせるのは技術だけではない」と言う。

朝子さんは三春町で5人姉妹の末っ子に生まれた。「家ではみんなが歌を歌っていた。例えば姉妹で掃除をしている時、誰か一人が歌を歌うと、みんなでハモり始めたり」と原点を振り返る。そして「公演が長く続いているのは、私たちが家族だからでしょう」と言う。今も音楽で伝えるのは、家族の温かさなのだ。

第24回 みんゆう県民大賞 2

芸術文化賞

長谷川ファミリー ㊥

ステージでの感動 糧に

成長

長谷川ファミリーの母朝子さん(59)は福島市で長く音楽教室を開いている。その環境の下、長女千鶴さん(31)、長男弘樹さん(27)も幼いころから楽器を学び始めた。武蔵野音大で学んだ朝子さん自身、「早くから学んでいれば、もっとうまくなった」との思いがあったからだという。

千鶴さんは1歳でバイオリンに触れ、めきめきと上達。小学4年生の1992(平成4)年秋には初めて母と2人、福島市の小ホールでステージに立った。母が歌、千鶴さんがバイオリン。福祉団体のイベントでわずか30分の舞台だったが、数百人の聴衆が沸いた。これが「ほのぼのコンサート」の第一歩だった。

さらに94年、2人は全国童謡歌唱コンクール大人部門で銅賞を受賞。この受賞が、母子の演奏活動に大きく弾みをつけたという。

100回記念コンサートで演奏する（右から）朝子さん、千鶴さん、弘樹さん ＝1999年、県文化センター

一方、弘樹さんは対照的。3歳の時、ピアノ教室に一度行ったものの興味を示さず朝子さんも断念。小学4年生になり父和弘さん(60)とチェロを学び始めたが、コンサートは主に母と娘で続けられた。

そんな家族に転機が訪れたのが97年秋。和弘さんを含め家族4人で出演した広野町での全国童謡歌唱コンクールで、弘樹さんは童謡歌手の真里ヨシコさんから声を掛けられた。「坊やのチェロ、良い音色だったね。(チェロ奏者の)ヨーヨー・マみたい」

「この一言が息子を変えた。子どもは興味を持つと、どんどん上手になる」と朝子さん。これ以降、母子の演奏は、チェロの低音を加え厚みを増した。ファミリーの足跡は、そのまま子どもたちの成長と重なる。

第24回 みんゆう県民大賞 3

芸術文化賞

長谷川ファミリー（下）

音楽家 それぞれの挑戦

長谷川ファミリーの基本的なアンサンブル編成は、母朝子（ともこ）さん(59)の歌とハープ、長女千鶴さん(31)のバイオリン、長男弘樹さん(27)のチェロ。「高音と低音それぞれを演奏する楽器と歌声。よく考えられた構成ですね―と言われる」と朝子さんは誇らしげだ。

家族で、本格的に活動を始めて十数年。小学生だった姉弟は成人し、共に音楽家として独り立ちした。

千鶴さんは東京芸大大学院を修了後、東京学芸大などで講師を務める。結婚して昨年秋には長男を授かった。弘樹さんは海外留学を経て現在、兵庫芸術文化センター管弦楽団の正団員。それぞれが新しいステージに立つ。

「だから、ほのぼのコンサートもスケジュール調整が大変」と言う朝子さんだが、自身も今、新しい試みに目を輝かす。

新ステージ

ミュージカル「笠子地蔵」の指導に向け音楽教室の教え子たちと準備に余念のない長谷川朝子さん（左から3人目）

朝子さんは昨年、文化庁の体験学習事業の一環で、学校でのミュージカル指導を始めた。今年は、約30年前に音楽教室の教え子が作ったオリジナル作品「笠子地蔵」を演目に、まず、福島市の笹谷小の子どもたちと上演を目指す。

「長年、多くの子どもたちを教えて思うのは、皆、音楽を学び楽しむことで変わる―ということ。うまく歌えなかった子、人前で何かするのが苦手だった子が、学ぶことで驚くほど成長する。私自身も音楽で変わった。音楽には人を変える力がある」と朝子さんは力を込める。

ほのぼのコンサートは今月下旬も三重県四日市市の小学校で開かれる。音楽に触れ、目を輝かす人たちとの出会いを求め、母と姉弟の旅はこれからも続く。